

形状弁別課題遂行による後側頭部のヘモグロビン濃度変化(日本基礎心理学会第24回大会,大会発表要旨)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Maehara, Goro, Taya, Shuichiro, Kojima, Haruyuki メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/7221

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



2P21

形状弁別課題遂行による後側頭部のヘモグロビン濃度変化

前原吾朗、田谷修一郎、小島治幸（金沢大学）

近赤外分光分析を用いて、形状の弁別によって後側頭部のヘモグロビン濃度
が変化するかを検討した。観察者2名は、形状弁別課題と位置弁別課題を行
った。形状弁別課題では、無意味な線画を記憶し、その後に連続して呈示され
る線画が記憶した線画と同じであるかどうかを判断した。位置弁別課題では、
線分の位置を記憶し、その後に連続して呈示される線分が記憶した線分よりも
上にあるかどうかを判断した。形状弁別課題と位置弁別課題は、間に休憩を挟
んで交互に6回ずつ行われた。1回の課題と休憩にかかる時間はそれぞれ1分
間であった。ヘモグロビン濃度を課題間で比較したところ、複数のチャンネル
で有意な差があった。後側頭部において刺激の形状に関する処理が行われたた
めに、形状弁別課題遂行中に酸化ヘモグロビン濃度は増加し、脱酸化ヘモグロ
ビン濃度は減少したと考えられる。視覚失認などの診断に近赤外分光分析が役
立つ可能性があるといえるだろう。